

ハワイ大学で 教えた体験

田中清泰

「アメリカの大学で経済学を英語で教える。」これを聞いて多くの日本人は「難しいだろうなあ」と思うでしょう。では次に、「夏学期に五週間のマイクロ経済学の授業を学部生にひとり教えてください。もちろん全部英語で。」と言われたらどんな気分になるのだろうか？

授業で学生に教える内容やどのような教科書を使うのかはすべてあなたの判断で自由です。とにかくすべて自分ひとりの責任で授業を遂行して下さいと言われた日には、その重責の重さにつぶされて現実逃避したくなるでしょう。

筆者は二〇〇三年から二〇〇八年までアメリカのハワイ大学マノア校に留学して、その留学中に英語で経済学をひとりで教えるという貴重な経験をさせてもらいました。自分の責任で、授業のシラバスに全スケジュールを明記して教科書のどの部分をどの日に教えてどのような宿題を課すのかを決めます。授業を教える目的や前提とする知識、また授業の受講によって習得できる知識など、授業に関わるあらゆることを正しい英語で書く必要があります。夏学期は集中講義の形式で週五回の授業を教えるため進度が速くて、毎日授業の準備をする必要があります。経済学の難しいコンセプト

を簡単に教えるには、具体例なども説明することもありました。頭で分かっているものではなく、毎朝六時くらいに

起きてその日に話す内容をすべて英語でノートに書いて準備していました。

もちろん最初に教える前は、前記のように心に暗雲が漂いひたすらその重責から逃げたい気持ちであったのは想像に難くないでしょう。大学で教えたのは二〇〇七年五月だったのでちょうど筆者が二六歳の時です。日本の大学を卒業してすぐにハワイ大学に留学して、基本的なコースワークを終えた後の留学四年目でした。英語で経済学の授業を受け、授業補佐で学生に補講をした経験があったものの、所詮は二六歳でまだまだ人生経験の浅い外国人でした。いま思うと、よくもまあそんな青二才の日本人にハワイ大学経済学部は授業の全責任を預けたものだと思います(苦笑)。今こうして振り返ってみると、無理難題とも思えることに挑戦して、たくさん失敗してたくさん学んでたくさんさんの思い出ができたと思えます。背伸びしたのは本当に貴重な体験となるのだと実感しました。

特に貴重なひとつの経験は、学生から評価される立場に置かれたことでした。授業を教え始めて五週間が経過し、最終試験が終わると学生が授業評価を行います。教え方がうまい自信はまったくなかったが、とりあえずやればできるものだという自信だけはつきました。学生による授業の評価がどうであるかは分からないが、けっこう丁寧に説明しているはずなので、そこまで悪いものにはならないだろうと願うばかりでした。試験で満点近くとする学生から評価されるのはいいが、あまり授業を理解していない学生からみたら自分はどう写るのだろうか？ 学生の理解度が散らばっていて、

授業のレベルを真ん中にすると、よく理解している学生は簡単すぎだと言いい、よく理解していない学生は難しすぎると言います。結局、半分の学生

による評価は良くなるわけがありません。しかも、授業の質を高めるためには、学生自体がどれだけ勉強をして授業を理解するのかが重要です。そのため、学生が授業を理解できなかった理由を、教師の責任とするのか本人の責任とするのか、それを決めるのは結局評価する学生の好みになってしまいます。いい評価をもらうためには、講師は大変な職だと感じました。

授業も終わり学生の授業評価もいい点数をもらい、特に大きな問題もなく最終評価を提出しました。その時は、刑務所で長い刑期を終えて自由の世界に解放された時のように、いまにも天に飛んでいけそうな気分でした。(もちろん筆者は刑務所生活を体験したことも、天に向かって飛んでからしばらくして、ハワイ大学の卒業シーズンがやってきました。教えた後に出席した卒業式は、自分が教えた経済学の授業を履修した生徒が卒業して一味異なりました。生徒の年齢と近かったので自分が先生という感覚はあまりなかったけれど、教えた生徒が卒業する姿は素直に嬉しかったです。英語で経済学を教えるのは苦勞の連続だし、自分は教育に向いていないと何回も思いました。それでも教えた生徒の成長は何者にも代え難い嬉しさで、この学生の人生に微力でも関わってよかったなと思いました。

ハワイ大学で教えるという無理難題を最初から放棄していたなら、こんな貴重な体験はできなかったでしょう。異文化のなかで無理難題の課題に取り組んだからこそ充実した人生経験になったのでしよう。自分を成長させてくれる異文化に感謝しつつ、前向きな気持ちをもって今後とも異文化に付き合っていけたらいいと思います。

